奈良女子大学　教育システム研究開発センター
NEWSLETTER 23
Nara Women's University
Center for Research and Development of Education Systems

「大学の「機能分化」状況における専門教育と教養教育との創造的再構成」プロジェクト

インタビューシリーズ第 13 回：文学部　鈴木広光先生

鈴木先生のご専門は国語学・日本語史学。とくにキリシタン文献やタイポグラフィ（印刷物における文字の体裁を整える技）の歴史がご研究のテーマです。文学部の学部長裁量経費プロジェクト『文学部における「共通知」の再構築に向けたフォーラムづくり』のメンバーのお一人として、本学の教育のあり方についてラディカルな問いを投げかけておられます。

■　根源的な問いとしての「教養」

――*この報告書（学部長裁量経費プロジェクト報告書）では、教養〞教育〞という言葉は形容矛盾だという意識が見え隠れしていますね。実は私もまったく同感なのですが、それではあらためて「教養」を、どのようにお考えでしょうか。*

「文学部では、専門教育は順調に回っていると思います。ただ一つ気になるのは、専門教育の中に、もっと強く「教養」を意識したものが入ってきてよいのではないかということです。それは、啓蒙とか、知識の習得のレベルではなくて、「本当にそういう考え方でいいのか」、「そういう方法でいいのか」という根源的な問いみたいなものです。専門の中で、方法や対象に対する根源的な問いをもった時、それ自体を問うていくことが「教養」であって、その時にそのことを考えるために、そして自分の考えていることをひとまず言葉にするために本も読んでみたりするわけです。そうすると、専門教育をやる過程で、教える側がどれくらいそういうことを意識して、学生に問いを投げかけるような形で教育ができるかどうかにかかっているのではないか。そういうことが教養と専門の関係についての私自身の考えの基本にあります。

だから、教養と専門とは並立させるのではなく、それぞれに含み込んだり、反映し合っていることが大事。ただ、何かを学んでいく上で根源的に問う、その方法は、ある程度教えてあげないとできないことです。こんなふうにものを見るんだという、ものの見方のヒントをどれくらい与えられるか、というのが私の考える意味での「教養」の教育上の大きな課題だろうと思います。伝統的なドイツ流の教養の考え方では、人格なんかの成長過程が想定されているでしょう。カリキュラムという積み立ての基礎になる部分として位置づけられているわけだけど、そういうのが積み立て型の「知」が幻想として信じきれなくなった世代で、全く否定するわけではないけれど、どうも開かれていないような気がする。そういった、カリキュラムという枠の中で伝えきれない部分をどう伝えていくかというのが、むしろ教養教育なのではないかと思います。」

「実は一般教養でやってみたい授業があるんです。一種のリテラシー教育。人間がつくった様々なものを対象として、それをどう読み解くか。僕はタイポグラフィの歴史を専門のひとつにしていますが、文字というのは内容や情報を示すだけではない。形やレイアウト自体に意味があります。でも、たとえば本だけでなく、テレビや広告などで伝えられているメッセージを支える文字の形やその配置の意味を普通、人は意識しませんね。ただ、無意識に何かを感じ取っている、あるいはイメージを刷りこまれているはずで、タイポグラフィや図像なんかを素材にして、それらをどう読むのか、と連ねていくと、様々なヒントになるだろうし、引き出しになるだろうと思うんです。知識ではなく、見方の引き出しをどれくらい学生につくってあげられるか。そのためのヒントになる授業を、従来型の「教養」や「専門」の枠にとどめないで、一般に開かれるようにできないかと考えています。

〈そのことがそのようにしてあること〉が認識されるためには、何によってそれがそのようにしてあるのか、ということを絶えず考えないといけない。それは簡単に言うと、自明のことを疑うという、学問の原則に行くわけですが、その問いが必ずしも絶えず発せられてはいないような気がします。」

■　教養の根本としての対話

――*ともすると奈良女の学生は「勉強癖」が身についているので、「疑え！」ということさえも鵜呑みにしてしまいがちですね。*

「それを、現在の教養教育のシステムで、たくさんの人たちがいるところで話をすると、所詮はありがたい「お話」になってしまう。聞く方も「面白かった」で終わる。問題は、新鮮な見方がどれくらい自分のものになっているかでしょう。そういう根源的な見方を対面的な指導の中で教師が言い続けると、そこの部分がまさに教養として、その学生本人にとってリアリティをもったのになり、自らの問題意識として考えることが可能になるはずです。だからゼミナールはもっと開かれていい。学生と話をする場をどうつくるか。私自身もそうですが、何か意見を、と振られてもすぐにしゃべれるものではないですよね。学生なんかはまさにそうで、絶えず口にする機会をつくっていないと。そして、他人に自分のことを話す中で、一回言葉にしてみるとその足りなさがわかるし、その時に対話であれば、相手が補ってくれるという一種の信頼感に支えられて、思わぬ方向に開かれることもあり得るし、相手が自分のことをドンピシャリと言ってくれることもある。話して、考え方を表出してみないと、どうしようもない。そういう機会をどれくらいつくるか、という話です。」

「学問は本来的に対話だったわけで、しかもそれが教養の根本ですから、それをどのように学生のために確保できるか、ということの方が重要ではないかと思います。学生とおしゃべりしながら、「そういえば、あれね…」といって学問の話ができる環境が、そこここにあったほうが良いと思います。そういう中で、先輩から教養を授けてもらうこともあるし、教員から「こんな見方もあるんじゃない？」とか「そういえばあの本読んだ？」とやると、おそらく学生は読みますよね。本当は「あれ読んだ？」というのは学生や院生の間で話題にしてほしいけれど。学生時代の僕の経験では、たとえばアンダーソンの『想像の共同体』とか、オングの『声の文化と文字の文化』がようやく日本語訳された時とか、何か注目すべき本が出た時には、とりあえずみんな読んで話題にしていました。そういう正規の課題ではないけれど、いわば隠れたカリキュラムが必要で、そのとっかかりとして絶えず教員の側が「あれ読んだ？」と学生に声をかける、そういうのが教養教育の在り方のひとつだと思います。」

■　フラットな情報を立体的に組み立てる力

「断片的な情報をある程度与えられた時に、トータルイメージを作ることができずに簡単に「わからない」と言ってしまうのは、おそらく教養がない証拠です。学生がそうならないようにしたい。人と話をしていて断片的な情報しか入ってこないというのは、一般社会では普通のことです。相手がそれを既知のものとして、「お前、知っているだろう」と言ってきた時、それにどう対処できるかということは、おそらくこれから世の中を渡って行く上での重要なスキルになる。情報が多ければ多いほど、そういう能力が必要になります。インターネットで流布している情報は、絶対に階層的ではない。秩序立っていないフラットな情報が、それこそ断片的に入ってくる。それをどうやって自分の中で階層化するか。あと時系列に置き換えたり、歴史の深みとして物語的に組み立てて自分の中でイメージする、という能力が必要になってきます。フラットに情報が入ってくることは決して悪いことではない。お仕着せの規範や権威として秩序だった知識をそのまま押しつけられるわけではなくて、組み替え可能な要素として与えられるわけですからね。それを組み立てる力そのものは、こちらの側に委ねられている。それを自分なりにどう組み立てていくか、自分なりの方法を身につけることもリテラシーの重要な一要素で、そういう意味でのリテラシーをどういうふうに身につけていくか、というのが教養教育の重要な課題になってくると思います。」

■　本当に重要なものへのまなざし

「そういうリテラシーは一朝一夕に身につくものではないから、読ませて、書かせて、添削して、を何度も繰り返す必要があります。ずっとやっているときついんです。学生もきついと思います。でもね、それは力になると思う。私のいう「教養」というのは、ものの見方、読む力、読み込んでいく力ですから、そういうものを身につける上で、大人数でやるのは全く馴染まない。いっそ「学ぶことと女性のライフスタイル」（注：ニュズレター第21号の野村鮎子先生インタビューを参照）を通年やったらいい。その中で基礎演習に類することもやってしまう。「学ぶことと女性のライフスタイル」だけでは見方が偏るというなら、もう１、２本プログラムを考えて。それを、余力のある人は２年、最低１年はやらないと。それが一番の教養教育になると思いますね。

教養ということに関して「学ぶことと女性のライフスタイル」に協力させていただいて良い経験をしたと思うのは、ミニゼミで離婚を扱った時です。女性だったら、旦那や子どもについての話以上に、離婚したら経済状況がどうなるか。離婚した女性を社会の成員として位置づける法制度や社会的基盤整備ができているかが重要で、それを問わないといけない。実はそこができてないからこそ「離婚は悪」という言説が罷り通っている。離婚しないがあたりまえだから、離婚するやつは放っておくなり、適当にあしらっておけばいい。そのような考え方から、結婚生活を送る人たちだけを優遇する制度が成り立っているとすれば、それは制度自体がおかしい。あらゆる人が何らかの形で法的な社会的基盤の恩恵を受けられない社会はおかしいはずです。ところが学生は、そち

らへの関心がおそろしく希薄なんです。母子家庭になったとき、どういう公的扶助があるのか、その制度がどれだけ生活していくのに十分か不十分か、そういうことを調べないといけないということを、それでようやく気づく。学生が自由に意見を言っているだけでは、その方向に議論は進まないので、むりやりそっちに持って行ったんですけど、そしたら離婚するのが悪行のような、「だって子どもかわいそうじゃん」という素朴な考えを持っているんですね。両親も仲いいから、両親を見習って、というのを自明とする通念がつくられてしまっている。離婚の問題が、裏付けとしての社会制度なり、法的な問題なりと密接にリンクしていることをきちんと知らないといけないと思いました。そこの部分をまず考えようとする視線の向け方が一種の教養だと思っています。そういう視線を身につける場所を１、２回生のうちにどう用意しておくかが大事だと思うんですね。」

■　手間をかける

「この種のものは、結構、時間を食うので、学生も教員もお互いに大変なんですが、一回、学生に手間をかけさせるというのはひとつの手かな、と思います。私が専門にしている文献学の世界は、資料となる古典籍をよそで見せていただくのも、それが個人所蔵だったりすると、すごく大変なんです。菓子折りや酒の１本も持って、まずきちんとご挨拶に行って、本を見せていただく、そういうこともします。最初の約束の取り付け方から、「こんなことがわかりました」という報告も含めて、調べ物をするための諸々をプログラムに落し込んだものは、教養教育として成り立つかもしれないと思うんです。実際にやる人は事前準備が大変だし、一人じゃできないし、何人かの先生とやるとすると打ち合わせをしないといけない。授業のやり方も変わってくるかもしれませんね。コマ数をもっと減らし、事前準備で２コマぶっ続けて時間をとるとか、考えてもいいような気がします。」

――*最初にアイデアを伺ったリテラシーの授業を立ち上げるとか、「学ぶことと女性のライフスタイル」を教養教育として位置づけ直すとか、が可能になるような柔軟なシステムを具体的に構築したいと考えているのですが。*

「同じような発想が理学部や生活環境学部でも出てきて、ワークショップを立ち上げられるといいですね。文理で一緒にやる必要も出てきますよね。これから絶対に必要になってくるのは、たとえば生命倫理とか、自分たちの生活にかかわってくるじゃないですか。学生たちも多くは結婚して、子どもを持つ時に、生命倫理の問題に直面するかもしれないし、自分の周りの環境がそうなるかもしれない。そう考えていくと非常に面白い話題が溢れていて、それを一時でも考えておけば、後々そのような場面に遭遇した時に「ああ、あの時あんなふうに考えたな。今の私だったらどう捉えるかな」となる。学生時代に正義感に燃えて、単線的に良い、悪いととらえていた事柄が、そういう単純な問題ではなくなって、どっちが良いという話ではなく、両方必要な話だと、大人になって思う。その時の考え方と今の考え方を、複数あわせて考える経験になるでしょう。どのみち、様々な考え方を自己の中に抱えながら生きていかざるを得ない以上、それについて考えたことがかつてあった、という経験がいくつもある方が絶対に有利なはずで、その機会をどう提供できるかという話です。生命倫理をやりだしたら、理系の先生と共同で行なっていかないとね、どうしようもないわけです。」

■　「語り」を読み解く力は「生き残るための術」

「他方、文学部的な思考について言えば、学部の分属ガイダンスの時、「言語文化学科に来ても、就職のためにすぐに役立つような知識やスキルを提供することはできません。ただし、これから生きていくために必要な世の中を読み解く力は絶対身につきます、これだけは保証します」といった覚えがあります。いろんなところから出てきている、あやふやで怪しげな、何か意図が隠されているかもという、質の見分けづらい情報って結構ありますね。文学研究は「語り」の問題を扱うので、「そのような場面でそのように語られているということは、そもそもどういうことなのか」を必ず考えます。情報は情報としてそこに色がついていて、どのように出されてきたか。文学作品がどのように提出されて今目の前にあるかを絶えず考えざるをえないわけだから、知らず知らずのうちに、読み解く力が身についていくはずなんですね。たとえば『平家物語』というのは一個の固定した本文の作品があるわけではなくて、多くの異本がありますが、それは単に本文が微妙に違うというだけでなく、同じことを語るにもその語り方が全然違うんですね。なぜ違うかを考えようとすると、それがどのような成立圏で語られてきたのか、また成立圏をどのように権力者たちが民衆を統治するためにその語りを採用したのかを絶えず考えざるを得ない。そうしたら、登場人物はどんな気持ちだったかとか、作者の意図とかはどうでもよくなって、「語り」のあり方そのものを検証せざるを得ない。翻って、新聞もニュースも政治家の言葉も「語り」ですね。語りは、まさに騙っている、騙しているわけです。それを単に懐疑して情報の真偽を問うのではなく、「それがなぜそのように語られるのか」を考えることが必要です。文学研究では、教える側が「語りのありようについてずっと考えながら読みなさい」と言い続ければ、おそらく読めるようになる。それは文学研究にとどまらず、これか

ら生きていく上での糧にもなれば、どうかすると武器にもなる。それが無いために、たとえば贋メールで騙される人も出てくるわけで、それは情報を情報として、そのまま受け取っちゃうわけですよね。文学研究とは、学問だけで抽象的に考えるような話ではなくて、「生き残るための術」だと思っているんです。」

■　開かれた環境づくりを

「その「生き残るための術」を教育するのには、最初から教科書や文献リストのような形に固定してしまうとダメだと思います。文献を読む、読まないというのは、学生と話しているうちにひょっと頭に浮かんで、「これをちょっと読んでみたら？」というのがいいんです。その学生の関心や主題とは少し違っていたとしても、そういうふうに勧めるのは誤ってないと思っています。そういうことを絶えずできるような場をつくることです。そういう雰囲気を醸成するためには、いきなりサロンをつくっても人は来っこないわけだから、絶えずそういうことを考えて、話しあっていなきゃいけないくらいの環境をつくる。たとえば「学ぶことと女性のライフスタイル」に類するような、授業以外の時でも友だちと話をしないといけない環境をつくる、そういう授業を組み立てる。それをウリにできたら、この大学はいい所だと思うんです。」

――*そういうことをきっちりやる、という評判ができれば、奈良女は大丈夫だと思いますね。*

「それを高校の先生に公開する機会をつくってもいい。奈良女でやるのはもちろんのこと、日本中にそういう考え方が広まってほしいじゃないですか。そうすると広報機能が重要で、企画段階から「教養」を考えている人が広報にも参与して、外部発信しつつ、パッケージ化して出すとか、人に見に来てもらうとか、絶えず広げていくような場はできないかなと思います。出前授業ではなく、この「場」に来てもらわないと。キャンパスがもつ場としての機能も含めて、どういうふうに学びの場を形成していくか。できるだけ閉じない場をつくっていくのが大事だと思います。学問自体が開かれているだけではなく、建物や人が、全部が開かれている空間、場を、どうつくるかということですね。

そして、そういう態度を教員が学生に見せていれば、学生は面白がって勉強するはずです。教員が「これはこんなふうになるの」って、ニコニコして、どうやったらその面白さを伝えられるかを絶えず考えていたら、普通ね、学生は好きになるはずです。学生が学びに関心をもったり、好きになってもらうには、自分が研究の最先端を走っているという自負、「それをいの一番に君たちに見せてあげるよ」ということが必要な気がします。僕らがそんなふうにしてやっていることを見せられる場を、授業以外につくるのも悪くはないかもしれませんね。文学部教員の研究交流集会に、院生くらいは聴きにきていいんじゃないでしょうか。

文学部の『まほろば叢書』も踏み出したじゃないですか。最初から皆のコンセンサスをとらなくてもいいから、できるところからやっていく。とりあえずやってしまった後で、「面白かったよ」という噂で、さらに学生が引きつけられてくる。それでいいんじゃないですか。見返りに何を寄越せ、ということではないし。やりたいことをやるには時間帯と部屋を好きなところを使わせてくださいとか、２コマ続けて組ませてくださいとか。そういうことから始めていけばいいわけで、それほど大きなハードルではないと思うんですね。」

（2012 年 5 月 17 日、インタビュアー：甲斐・西村）

Newsletter バックナンバーのご案内

「大学の「機能分化」状況における専門教育と教養教育との創造的再構成」プロジェクト・インタビューシリーズ

Newsletter 15　(2011 年 7 月 7 日発行)
センターの新たな高等教育研究・開発
プロジェクトの構想と協力のお願い

Newsletter 16　(2011 年 10 月 1 日発行)
第 1 回：角田秀一郎先生（理学部）
第 2 回：森本恵子先生（生活環境学部）

Newsletter 17　(2011 年 10 月 21 日発行)
第 3 回：野口哲子先生（理学部）
第 4 回：内田忠賢先生（文学部）

Newsletter 18　(2011 年 11 月 20 日発行)
第 5 回：今岡春樹先生（生活環境学部）
第 6 回：塚原敬一先生（理学部）

Newsletter 19　(2011 年 11 月 30 日発行)
第 7 回：三野博司先生（文学部）

Newsletter 20　(2011 年 12 月 25 日発行)
第 8 回：増井正哉先生（生活環境学部）
第 9 回：植野洋志先生（生活環境学部）

Newsletter 21　(2012 年 4 月 10 日発行)
第 10 回：野村鮎子先生（文学部）

Newsletter 22　(2012 年 6 月 20 日発行)
第 11 回：松岡悦子先生（生活環境学部）
第 12 回：寺岡伸悟先生（文学部）

■　奈良女子大学教育システム研究開発センターニューズレター 23　■
2012 年 7 月 20 日発行
奈良女子大学教育システム研究開発センター
住所：〒 630-8506　奈良市北魚屋東町
奈良女子大学コラボレーションセンター 204
TEL.：0742-20-3352
Website：http://www.nara-wu.ac.jp/crades/
E-mail ：crades@cc.nara-wu.ac.jp